

紀行文学・映画の中のサンティアゴ徒歩巡礼：  
ブームの立役者たち

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今野, 喜和人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00028155">https://doi.org/10.14945/00028155</a>

# 紀行文学・映画の中のサンティアゴ徒歩巡礼 ——ブームの立役者たち——

今 野 喜 和 人

## はじめに

イエス・キリストの十二使徒の一人、聖ヤコブの遺骸がまつられているというスペイン西端のサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂まで、ヨーロッパの各地から巡礼者の大群が押し寄せたのは中世のことだった。その後宗教改革や、啓蒙思想の拡張による脱キリスト教化・世俗化によって巡礼者の数は激減し、20世紀中葉までには往時の隆盛ぶりが想像できないほど、旧巡礼路もすっかり荒廃してしまった。ところが、1980年代後半から、自分の定めた地を出発点に選び、最低1週間から1ヶ月、ときには2ヶ月以上の時間をかけて徒歩でサンティアゴを目指す巡礼者たちが再び現れるようになり、現在ではその数が年間数十万人に達している<sup>1</sup>。かつては基本的にヨーロッパに住むカトリック教徒に特有の信仰行為だったものが、今では世界各地から様々な動機を持った人々が集まる、一種の文化現象となっているのである。いったい何がそのような流行を生み出したのだろうか。

一つにはもちろん、20世紀後半の観光ブームが引き起こした歴史遺産や景観への興味が、自然愛好や健康志向の高まりを受けたウォーキングブームと結び付き、時間をかけてゆっくりと中世の巡礼路を辿る体験に人々が惹きつけられたという事情が挙げられる。1987年に始まった欧州評議会による文化路整備計画は、ヨーロッパ各地に歴史と文化を絡めた遊歩道を整備し（フランス語でGR

---

<sup>1</sup> 2019年の徒歩巡礼完遂者（条件については後述）は347,578人であった。なお、以下の巡礼者数に関するデータはすべてサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂巡礼事務所ホームページ（<https://oficinadelperegrino.com/>）もしくは日本カミーノ・デ・サンティアゴ友の会ホームページ（<https://camino-de-santiago.jp/>）記載の統計に拠っているが、現時点（2021年2月13日）においてはすでに掲載されていないものも含まれている。完遂者以外にも、途上で踏破を断念した巡礼者や、いわゆる「区切り打ち」（四国遍路で何度かに分けて巡礼路を歩むことを言う）の人々も入れれば、数はもっと大きくなる。

(ジェー・エール——Les sentiers de Grande Randonnée)と呼ばれている)、サンティアゴ巡礼路もその一環となった。1993年にはユネスコにより、スペインのサンティアゴ巡礼路が「道」としては初めて世界文化遺産に登録され、国内外での認知が進んだ(98年にはフランス側の巡礼路も別途に登録されている)。地元の教会・修道院や自治体、あるいはスペインはもちろん世界各地に誕生した「カミーノ・デ・サンティアゴ友の会」の活動によって、巡礼路や宿泊施設の整備が巡礼者の増加に後押しされる形で進み、それがさらに新たな巡礼者を惹きつけるという状況が続いている。

しかし現代におけるこうしたブームは、かつての宗教的「巡礼」が、世俗的な「ツーリズム」に単純に変化した結果ではない。サンティアゴ巡礼路を伝統的なカトリック信仰の一環として歩む人が激減しているのは確かだが、一方で単なる「観光」や「体力的挑戦」としてのみ、この徒歩行を捉えている人はどちらかと言えば少数派である。サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂巡礼事務所が正式に発行する巡礼証明書(コンポステーラ)を受け取るには、サンティアゴまでの最後の道のりを最低100キロメートル以上歩み(自転車や馬を利用する場合は200キロ)、「クレデンシャル」(一種のパスポートとなる巡礼手帳)に、通過地の様々な施設、一日二カ所以上で、スタンプを押してもらう必要がある。それに加えて、目的地であるサンティアゴの事務所で、巡礼の動機に関するアンケートに答えなければならない。アンケートは三択になっていて、「宗教」、「宗教および文化的興味」、「その他」のいずれかを選ぶのだが、2019年のデータでは、それぞれの回答割合が40.31%、48.71%、10.98%となっている。すなわち、巡礼を純然たる非宗教的行為として捉えている人は約1割に過ぎないということになる(もちろん、最初から巡礼証明書を目標にしていなかった人々も相当数いるので、実際の数字はもっと大きくなるが)。

ただし、このアンケートにも前提があって、最後の項目「その他」を選んだ場合は正式の巡礼証明書は受け取れず、「歓迎証」という別の書類が与えられることになっている。事務所のホームページ(英語版)には巡礼証明書発行の条件として“Make the pilgrimage for religious or spiritual reasons, or at least an attitude of search.”すなわち「巡礼を宗教的もしくは霊的(精神的)理由、あるいは少なくとも探求の態度で行うこと」と書かれている。教会側としてはあくまでも巡礼を広義の宗教行為として捉えたいという姿勢の表れなのだろうが、回答者は正式の巡礼証明書を得たいがために、自らの動機を偽る可能性も無いではない。その上、現在では最も回答数が多くなっている第二の「宗教および

文化的興味」の部分に柔軟性があり、自らを教団宗教の信者とはっきり規定していない場合でも、この項目を選ぶことにそれほどためらいはないだろう。それはまた、現代における「スピリチュアリティ」のブームとも関連している。「レリジヤス」(宗教的)ではないが、「スピリチュアル」(精神的・霊的)であるというSBNR (Spiritual, But Not Religious) の表現にも見られるように<sup>2</sup>、組織的宗教の信者ではなく、また教会に通うことや教義自体に関心はないにもかかわらず、霊的な事象全般には広く関心を抱く心性が、「スピリチュアリティ」の流行と関係付けられることが多い。畢竟それは、近代において教団宗教が力を失った結果、宗教が「私事化」(privatization)したことがもたらした現象でもある。サンティアゴに限らず、「巡礼」を特定の教団や宗派の信仰行為としてではなく、個人的な霊的・精神的関心に発する行為として、抵抗なく捉える人々が現代では多数存在し、サンティアゴ巡礼ブームを担ったということである。

さらに、こうしたブームの背景にはサンティアゴ巡礼に特有と言っても良い要素があった。それは世界的にベストセラーになった紀行文学と、大ヒットした映画の存在である。近年は、文学・映画に留まらず、漫画やアニメ等の成功がその舞台となった場所へと多数の観光客を引き寄せる「コンテンツツーリズム」という言葉がよく聞かれるようになった。それは個人的な観光行動に留まらず、自治体や観光業者もこれを当てにした施策を講じることで、社会・経済・文化に大きな影響を与えているが、サンティアゴ徒歩巡礼には正にこのような「コンテンツツーリズム」としての側面があり<sup>3</sup>、文学や映画の果たした役割が大きいと言われている。しかも注目すべきは、それらの作品のほとんどが、広い意味でスピリチュアルな方向性を多かれ少なかれ持っているということである。本稿ではこのようなブームを引き起こした作品のうち、日本でも翻訳・公開されて日本人巡礼者の増加(2019年のデータで1,452人)にも一役買ったと思われる<sup>4</sup>いくつかを概観し、特に現代社会における宗教事情との関連で論じてい

---

<sup>2</sup> 実際はreligiousとspiritualの境界——もしくは包摂関係、すなわちどちらがより広い概念なのか、どこが重なり合うかなど——は規定が難しい。アメリカ人に対するアンケート調査としては以下の論考を参照。P.L. Marler & C.K. Hadaway, “Being Religious” or “Being Spiritual” in America: A Zero-Sum Proposition? in *Journal for the Scientific Study of Religion*, 41:2 (2002), pp. 289-300. (<https://www.jstor.org/stable/1388009>)

<sup>3</sup> 日本では「コンテンツツーリズム学会」まで生まれているほどよく聞かれるこの表現Contents Tourismは英語では人口に膾炙していない。literary tourism, film tourism, movie-induced tourism, television tourismなど、媒体別に表現するのが普通である。cf. Sue Beeton, *Film-Induced Tourism*, 2<sup>nd</sup> ed., Bristol, Buffalo & Toronto, 2016.

<sup>4</sup> 筆者は2020年10月、フェイスブック上のサンティアゴ巡礼愛好者のグループ「スペイン巡礼フレ

きたい。

## パウロ・コエーリョ『星の巡礼』

1990年頃から始まるサンティアゴ徒歩巡礼の隆盛に、パウロ・コエーリョ (Paulo Coelho, 1947年-) の『星の巡礼<sup>5)</sup>』(原著1987年) がもたらした寄与は、いくら強調してもし過ぎることはない。むしろ、具体的にどれだけの数の人々がこの本に触発されて巡礼を決心したかは統計的に表せないものの、様々な調査によって本書がサンティアゴ巡礼を知るきっかけ、出発した動機となったと証言する巡礼者が非常に多い<sup>6)</sup>。ちなみに、巡礼完遂者の国籍で、コエーリョの母国ブラジルが第10位、6,000人余り(2019年のデータ)と多数に及んでいるのも本書の直接的・間接的影響が大きいと言われる。徒歩巡礼を行った人の多くが、何らかの形(商業出版だけでなく、自費による電子書籍や、ブログ等のSNSを利用して)で巡礼の記録を書き残すが、その中で行うコエーリョへの言及がさらに作品への興味を掻き立て、新たに巡礼に歩み出す人々を再生産するという状況が今でも続いている。

『星の巡礼』はブラジル、リオデジャネイロ生まれの作家コエーリョのデビュー作で、1987年に出版されると、その年のうちに国内のベストセラーリストに載った。さらに、その翌年に発表された第二作の『アルケミスト<sup>7)</sup>』の世界的大成功に引きずられるように、各国語に翻訳されて多くの読者を獲得することになる。本書の冒頭でサンティアゴ巡礼の歴史を振り返った後の紹介——「今日では誰も、何百万人もの人々がこの道を通りすぎ、この道に沿って新しい世界を作ったことを思い出しもしないのである」(邦訳20頁)という言葉には誇張もあるが、この作品による具体的な描写で初めてサンティアゴ巡礼の存在を知った読者は

---

ンド)で簡易的なアンケートを試みた。巡礼経験者に次の質問を投げかけたところ、60名から回答を得た。「徒歩巡礼を決意するにあたって大きな推進力を与えたドキュメンタリー、巡礼記(書籍もしくはブログ)、映画、小説等(いわゆる「コンテンツ」)がありますか」——それに対して、「ある」と答えた人は55%だった。

<sup>5)</sup> Paulo Coelho, *O Diário de um mago*, 1987. 山川紘矢他訳『星の巡礼』角川文庫、1998年(初版は地湧社、1995年)。

<sup>6)</sup> 山中弘編『宗教とツーリズム——聖なるものの変容と持続』(世界思想社、2012年)、第5章「信仰なき巡礼者——サンティアゴ・デ・コンポステーラへの道」(岡本亮輔)、129頁。ちなみに、注4で触れた筆者による簡易アンケートでは3名が『星の巡礼』を挙げた(回答者が初めてサンティアゴ巡礼を行ったのはいずれも2000年以降)。

<sup>7)</sup> Paulo Coelho, *O Alquimista*, 1988. 山川紘矢他訳『アルケミスト——夢を旅した少年』角川文庫、1997年(初版は地湧社、1994年)。同書はサンティアゴ巡礼を直接扱ったものではないが、主人公の少年「サンチャゴ」の遍歴がテーマになっている。

多かった。とりわけ、スペイン国境に近いフランス側のサン＝ジャン＝ピエド＝ポールから、ピレネー山脈を越えて内陸部をほぼ東西水平に歩く「フランス人の道」を具体的な路程と共に説明した功績は大であった。

しかしながら、原題の *O Diário de um Mago* すなわち『魔術師の日記』が示すように、同書は純然たる紀行文というよりは、コエーリョの独特の世界観を映した小説である。カトリック系の秘密結社RAMという教団に属する「私」パウロが、導師（マスター）による秘儀伝授の後の試験に落第したため、真のマーゴ（マグス／魔法使い／魔術師／術師）となるためにサンティアゴ巡礼路を「ガイド」と共に歩くよう求められる。その上で「私」が巡礼路の途上で数々の「実習」をこなしていき、最終的に「悟り」、自己の内なる力を発見するに至る、というのが、大まかなあらすじである。コエーリョによればこの物語は自身の実体験を基にしたものであって、RAMという教団も実在し、本書発表前年の1986年に彼は師と共に55日間かけてサンティアゴ巡礼路を歩いたという<sup>8</sup>。このように秘儀や魔術へのストレートな言及など、作品にまつわるおどろおどろしさや神秘的警句をちりばめた文体は批評家からは種々の批判を浴びたが、それにもかかわらず（あるいはそれゆえに）、熱狂的な読者を多数生み出し、コエーリョをモデルとしてサンティアゴ巡礼を歩み出す人々が増えていったのである。

コエーリョがこのように多くの読者を獲得した背景には、21世紀の「スピリチュアリティ」ブームの前段階、1980年代および90年代に流行した「ニューエイジ」ムーヴメントがあった。「ニューエイジ」と一口に言っても、これまた実態は多種多様で、統一した運動体があるわけではなく、むしろ統一した教義がないところに大きな特徴があると言ってもよい。仮にインターネット上で読める簡潔な定義を引用するところなる。

宇宙や生命という大きな存在と自己とのつながりや、人間のもつ無限の潜在能力を強調し、個人の霊性・精神性を向上させることを目指す思想・実践で、一種のサブカルチャーとして広く社会に存在する。米国ではニューエイジ、日本では精神世界と呼ばれることが多い。ニューエイジや精神世界の具体的なかたちは一様ではなく、瞑想、チャネリング、占星術、気功、自然食、セラピーなど様々な形態をとる。またその活動は、本・雑誌、イ

<sup>8</sup> ファン・アリアス（八重樫克彦他訳）『パウロ・コエーリョ 巡礼者の告白』（新評論、2011年）、17頁。ちなみにRAMの実態は不明だが、500年以上の歴史を持ち、現在自分を含めて5名しかメンバーはいないとコエーリョは同書のインタビュー（1998年）で述べている（142-143頁）。

ンターネット、イベント、ワークショップなどによる、緩やかなネットワークによって支えられていることが多い [後略]<sup>9</sup>。

この短い定義を読むだけで、コエーリョの描いた巡礼の世界と「ニューエイジ」の親和性が高いことは理解できるだろう。『星の巡礼』の歩みが最終目的としているのは正に「個人の霊性・精神性を向上」させることに他ならず、その過程で瞑想や呼吸法、魔術的儀式を通じて「世界との調和」(邦訳187頁)を目指す実習(修練)が課せられ、人間の潜在能力を発揮するよう「私」は誘われる。その中には「生きたまま葬られる実習」(邦訳163頁)などもあり、まさに、死と再生の擬似的体験を核にした古典的な通過儀礼の現代版を描いた物語だったと言えよう。本書における神秘的な部分、魔術や儀式の詳細などを読者がどのようなスタンスで受け取ったか正確には窺い知れないが、自らの置かれた立場を脱却して新しい人間になるべく、「自己発見」とか「自分探し」を求める人々をサンティアゴ巡礼路に引き寄せた効果があった。多くの人が「小説『星の巡礼』を追体験するかたちで<sup>10</sup>」、サンティアゴへの巡礼路を歩み出したのである。

ただし、コエーリョの場合は「カトリック」と自己を規定するだけあって、スピリチュアルな事象を描く際にも、ある種の自制が働いている。小さな「奇跡」や「メッセージ」の受信など、超自然的と言ってもよい描写は数多くあるのだが、一方で現代の安易なオカルト愛好者たち(「タロットの秘密やピラミッドパワーに関する本に囲まれている者」)に警鐘を鳴らすことも忘れない(邦訳168頁)。本人の談によれば、コエーリョは若い頃にアレイスター・クロウリーからインスピレーションを受けた黒魔術の体験にのめり込んだというが、そこから脱却できてカトリックに回帰したという自己認識が、このような言葉に繋がっているのだろう。おそらくこの辺りの姿勢も、世界中の一般的な(とりたてて魔術マニアではない)読者にもアピールしたのだと思われる。

<sup>9</sup> 岩井洋「ニューエイジ」(『知恵蔵』、朝日新聞社、2007年)。「コトバンク」<https://kotobank.jp/word/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%A8%E3%82%A4%E3%82%B8-186035> (2021年2月13日最終閲覧)

<sup>10</sup> 黛まどか『星の旅人——スペイン「奥の細道」』、角川文庫、2009年(初版、光文社、2000年)、「あとがき」155頁。

## シャーリー・マクレーン『カミーノ』

コエーリョの『星の巡礼』と並んで、サンティアゴ徒歩巡礼者の増大に力を貸したと言われるのが、シャーリー・マクレーン (Shirley MacLean Beaty、1934-) の『カミーノ——魂の旅路<sup>11</sup>』である (以下、『カミーノ』と表記する。なお「カミーノ」とはスペイン語で「道」の意味で、大文字で (El Camino) 書かれることで、現在ではサンティアゴ巡礼路を指す国際語になっている)。言うまでもなく、アカデミー主演女優賞を獲得したこともあるハリウッドの女優であるが、一方で世界的ベストセラーになった『アウト・オン・ア・リム』などの著作で自らの神秘体験を直截に語り、ニューエイジの騎手とも呼ばれる存在でもあった。その彼女が60歳になった1994年に、コエーリョと同じくサン＝ジャン＝ピエ＝ド＝ポールから「フランス人の道」を辿ってサンティアゴ・デ・コンポステラまで、約800キロの道のりを歩んだ記録が、この『カミーノ』である。

『カミーノ』にコエーリョの名前は出て来ず、マクレーンがサンティアゴ巡礼を行おうとした動機の中にコエーリョの著書がどれだけの位置を占めていたかははっきりしない。ただ冒頭近くで1991年に「ブラジル」滞在中、差出人不明の手紙が届き、その中に「サンティアゴ・デ・コンポステラに出かけるべきである」と書かれていたというエピソードが書かれている (邦訳17頁以下) とともに、少なくとも間接的にはコエーリョの影が見える。さらに、「私はカミーノに関する本をたくさん読んで、犬のことは聞いていた。その中に、犬の群れに襲われたという男が書いた本があった」 (邦訳65頁) —— という記述があり、これが『星の巡礼』のことを指しているのかもしれない (事件が起きた村の名も「フォンセバドン」で一致している)。ちなみに巡礼路にしばしば見られる、放し飼いだったり野良だったりする犬たちは、確かに徒歩巡礼者を悩ませる存在なのだが、コエーリョが悪魔的存在の連想と共に犬との対決を書いたことが、後の巡礼者たちに実際の被害以上に恐怖を与えている側面もあり、多くの巡礼記の中で触れられている。

ともあれ、『カミーノ』には「ニューエイジ」関連の語彙の中でもとりわけ先鋭的なオカルト用語が、コエーリョの『星の巡礼』より頻出する。そもそもこ

---

<sup>11</sup> Shirley MacLaine, *The Camino : A Journey of the Spirit*, 2000. 山川紘矢他訳『カミーノ 魂の旅路』飛鳥新社、2001年。

の東西に延びる「フランス人の道」は「銀河の真下に横たわり、大空にある星々から流れ出しているエネルギーを反映しているレイ・ラインに沿っている」(邦訳15頁)という説明が冒頭近くで行われる<sup>12</sup>。日本で一時期から流行した「パワースポット」などの概念とも関係のあるこの「レイ・ライン」(ley line)への言及はまだ序の口で、それ以外にオーラ、チャクラ、空中浮遊、予言、輪廻、前世、天使、宇宙人、アトランティス等々といった言葉が一切の懐疑精神無しに本書の至るところに現れる。コエーリヨの書にはそれでもまだあった抑制はほとんど見られない。

しかしマクレーンの本は、コエーリヨの著書以上に現実のサンティアゴ巡礼路を忠実に映している側面もある。というのも、『星の巡礼』では徒歩行の細々とした実際的部分の描写(例えば宿での宿泊・食事の詳細など)が欠けていて、他の巡礼者との交渉もほとんど描かれなからである。もっともコエーリヨが歩いた当時、サンティアゴ徒歩巡礼者の数は極めて少なく、80年代前半の正式な巡礼完遂者の数は年間数百人だったとされているから、実際に他の巡礼者にはほとんど出会わなかったとも考えられる。その後、すでに指摘したように、正にこの『星の巡礼』の世界的成功も一因となって巡礼者は増大し、マクレーンが歩いた年の前年1993年はいわゆる「聖年<sup>13</sup>」に当たっていたこともあって、早くも10万人近くの巡礼者を数えている。それによって徐々に整備された巡礼路沿いの「アルベルゲ」もしくは「レフーヒオ」(巡礼宿)にマクレーンは泊まり、そのお世辞にも快適とは言えない環境(バラック建ての宿舎、大部屋で眠る他の巡礼者のいびき、冷たいシャワー)(邦訳70頁など)についてもあからさまに描いている。他の巡礼者たちとの交流に関する描写もあり、有名女優であるところからパパラッチに追われた不愉快な経験も事細かに書く。すなわち、『星の巡礼』の中にあつた一種幻想的な行程描写が、ここでは基本的にリアリズムに席を譲っていて、『星の巡礼』以上にサンティアゴ巡礼路の現実の姿を全世界の人々に紹介したのである。

---

<sup>12</sup> サンティアゴ巡礼路と「銀河」の繋がりには伝統的なもので、元来は銀河の流れる方向を辿っていけばサンティアゴに行き着ける、という発想から生まれ、フランス語では天の川(Voie lactée)が“chemin de Saint-Jacques”(聖ヤコブの道)とも呼ばれている。コエーリヨの著書が原題とはかけ離れた『星の巡礼』という邦題で訳されたのも、この連想からである。

<sup>13</sup> 「聖年」とは聖ヤコブが殉教した日とされる7月25日が日曜日に当たる年で、この年に巡礼した者は特別に罪の赦しが得られる(教会側も様々な配慮を行う)ということで巡礼者の数が増大する。2021年は聖年に当たるが、コロナ禍のために、特別に聖年をもう一年延長するという報せが伝わっている。

カミーノの作用でマクレーンが獲得したという自己発見はコエーリョの場合よりずっと過激であり、その中には太古のアトランティスにおいて行われた「両性の分離」に関するヴィジョンまでが含まれていた。こうした大言壮語と距離を置く読者も多かったと思われるが、コエーリョとマクレーン二人のおかげで、サンティアゴ巡礼路は人間に自らの内面を再発見することを促す、神秘的道であるというイメージが広く植え付けられたのであった。

## ハーペー・カーケリング『巡礼コメディ旅日記』

ハーペー・カーケリング (Hans-Peter „Hape“ Wilhelm Kerkeling, 1964-) はドイツで極めて有名なコメディアン (日本で言う寄席芸人、漫談師に近い存在) である。その彼が、2001年6月から7月にかけて、これまた「フランス人の道」を歩いた経験を基に書いた『巡礼コメディ旅日記<sup>14</sup>』(以下『旅日記』)(原題前半の *Ich bin dann mal weg* は「ちょっと出かけてくる」くらいの意味) を2006年に発表すると、一躍大評判となり、最終的に四百万部を超える売り上げと、「ノンフィクション部門で戦後最大のベストセラー」(訳者あとがき、359頁) を記録したと言われている。もちろんサンティアゴ徒歩巡礼の認識拡大にも貢献し、この本の読書経験が多くの人々を巡礼に誘ったことは、徒歩巡礼完遂者の国籍別集計で、ドイツが2005年7,155人、2006年8,097人、2007年13,837人、2008年15,746人と、本書出版後に激増している事実からもある程度推定できる(2019年の統計でドイツはスペイン、イタリアに次いで三位、26,167人である)。

邦題に「旅日記」とあるように、全体が日付で章立てされており、「2001年6月9日 サン・ジャン・ピエ・ド・ポール」から「2001年7月20日 サンティアゴ・デ・コンポステラ」まで、巡礼路を順に辿る構成になっている。当然、コエーリョはもちろん、マクレーンよりも忠実な紀行文的性格が強まり、それぞれの街の様子、アルベルゲの実情(カーケリングはその劣悪な環境を嫌ってほとんどホテルに泊まっているが)、地元民や他の巡礼者との交流に多くのページが割かれている。マクレーンと同じく有名人であるため、巡礼中に同国人からサインを求められるなどの経験もしているものの、途中から同行することになるイギリス人女性とニュージーランド女性には詳細に身分は明かさず、通常の友情を育んでいる(ちなみにカーケリングはゲイであることを隠さない)。巡

<sup>14</sup> Hape Kerkeling, *Ich bin dann mal weg: Meine Reise auf dem Jakobsweg*, 2006. 猪俣和夫訳『巡礼コメディ旅日記——僕のサンティアゴ巡礼の旅』、みすず書房、2010年。

礼路のリアルな世界が忠実に描かれていると言えるだろう。

そのぶん、全体にユーモラスな巡礼記として気軽に読める作品だが、ここでもサンティアゴ徒歩巡礼のスピリチュアルな意味合いについての記述に事欠かない。マクレーンの『カミーノ』を読んで巡礼になったという巡礼者たちと出会った場面で、彼はこう書いている。「その本は、僕も、面白いし<sup>ため</sup>為になるからということで、これまであれこれ引き合いに出してきたガイドブックを別にすれば、唯一の旅のお供の書としてリュックに詰め込んできた」(邦訳76頁)。徒歩巡礼者にとって、リュックをいかに軽くするかは巡礼完遂の成否にも関わる重大な問題であり、携える書物についても厳しい選択が行われる。その中で決して軽くはない同書(邦訳で300ページを超える)を持参したということは、「面白いし為になる」レベルを超える意味を与えていたことになるだろう<sup>15</sup>。実際、本書冒頭近くで「レイライン」の紹介が『カミーノ』と同様になされるし、旅の実際の詳細以外の語りの部分には、コメディアンとして成功するまでの自らの来歴に、スピリチュアルな彷徨の記憶を豊富に混ぜ合わせている。

それによると、カトリックといっても厳格な信仰を持つ家に育ったわけではなかったものの、小さい頃から「宗教に関するテーマはどんなことでも」興味をそそられたと語る。しかし、「一時期、本気で、プロテスタントの牧師か、せめて宗教学者になるために回心しようかと考えたこともある」(邦訳15頁)と述べ、現在の立場としては「いわばキリスト教徒に仏教を継ぎ足したような人間だ」(邦訳14頁)という。ニューエイジはあまり「神」を語らないとよく言われるが、本書全体に「神」の言葉は頻出し、その数はコエリョやマクレーンの書を圧倒しつつ、それをキリスト教の神と限定することはない。巡礼を始めるにあたって、「神は存在するのか」という問いを立てながら、「あるいは、ヤハウエ、シヴァ、ガネーシャ、ブラフマン、ゼウス [……]、仏陀、アラール [……] は？ 名前はいくらでも出てくる……」とたたみかける(邦訳14-15頁)。

本書には「死」に関する思索もふんだんに現れ、巡礼を行う数年前に友人に誘われたという「<sup>ラインカーネーション</sup>輪廻セミナー」への参加について思い返している箇所がある(邦訳182頁以下)。三日間にわたって「瞑想や沈思のテクニック」を学んだ

<sup>15</sup> 以下のような記述もある。「ちなみに、この道を歩いているのは、ほとんどがシャーリー・マクレーンの『カミーノ』やブラジルの作家パウロ・コエリョの『星の巡礼』の影響を受けた人たちだ。その人たちがどの本をどう読んでどう思ったかは別にどうでもいいんだけど、ただ、みんながみんな、それをここに持ってきてるっていうのには、ちょっとビックリした。拍車のようなものなのかな」(邦訳181-182頁)。

後、指導者によって「前の生」へ戻ることを促されたカーケリングは、自分が第二次世界大戦中のポーランドに生きる修道士となったヴィジョンを視る。修道院内でユダヤ人を匿ったことがドイツ兵に発覚して、最後は銃殺されるまでの情景を体験するのだが、セミナー後の結論は以下の通りである。「僕は今、[……] 虚空を眺めながら疑うのを楽しんでいる。いつかは固く信じる日が来るのだろうか。ぜひそうなって欲しいとは思うけど」(邦訳188頁)

正統的キリスト教とは基本的に相容れない「輪廻」のテーマは、マクレーンの書にも明らかなように、キリスト教から見れば異教、異端の説を取り込む形で、ニューエイジ思想の中核に置かれていた<sup>16</sup>。こうした「輪廻セミナー」も1980年代以降盛んに行われていて、一部の過激なオカルティストの専売特許ではなくなっていたのである。カーケリングはマクレーンほど輪廻説にのめり込むことはなかったようだが、巡礼において「神」の存在を求める心の背景に、こうした事象へのシンパシーがあったのは間違いない。いずれにせよ、カミーノ体験はカーケリングにとってまた、自分が何者であるかを知り、「神」と出会うためのイニシエーションとなった。

### コリーヌ・セロー 『サン・ジャックへの道』

現代におけるサンティアゴ徒歩巡礼ブームに貢献したのは紀行文学ばかりでなく、映画の力も大きい。サンティアゴ巡礼をテーマにした映画と言えば、シュールリアリストであるルイス・ブニュエル監督の『銀河』(*La Voie lactée*, 1969) がまず挙げられるが、これは本稿の扱う年代と関心を外れている(もっとも、この映画中に登場するプリスキリアヌス派他、過去の様々な異端の描写は、サンティアゴ巡礼路にまつわる神秘的イメージとも関係しているのも、まったく無関係とは言えないのだが)。ここではフランスにおいてサンティアゴ巡礼への関心を呼び起こした作品として、コリーヌ・セロー監督の『サン・ジャックへの道』(*Saint-Jacques... La Mecque*, 2005) を取り上げよう(サン・ジャックとはフランス語で聖ヤコブのこと)。巡礼者の旅の具体的描写だけでなく、サンティアゴ巡礼路沿いにある美しい自然と文化遺産をふんだんに映して評判になり、多くの観客を集めた作品である。なお、この映画では上記三作と違い、

---

<sup>16</sup> cf. W.J. Hanegraaf, *New Age Religion and Western Culture: Esotericism in the Mirror of Secular Thought*, New York, 1998, p. 262 et seq. なお、ニューエイジ思潮にはこれと境を接する(ときに重なり合う)「新異教主義」(Neopaganism) という傾向もあり、時代と地域を越えた非キリスト教的信仰に広く関心が寄せられた (ibid., p. 77 et seq.)。

スペインよりも、フランス中南部ル・ピュイ・アン・ヴレから始まるフランス側の道（いわゆる「ル・ピュイの道」）が重点的に描かれる。

コリーヌ・セロー（Coline Serreau, 1947—）は『赤ちゃんに乾杯』（*Trois hommes et un couffin*, 1985——ハリウッドで*Three Men and a Baby*（邦題『スリーメン&ベビー』）としてリメイク）で世界的に有名になった女流監督である。本作*Saint-Jacques... La Mecque*という韻を踏んだ原タイトルを直訳すれば『聖ヤコブ……メッカ』となるが、その意味は後述するとして、作中に登場する巡礼者たちはいずれも伝統的なカトリック信者ではない。中心になるのは母を亡くした中年の長男、長女、次男の三人で、資産家の母が遺産相続の条件として、サンティアゴ徒歩巡礼をきょうだい揃って行うことを求めたという遺書が明かされるところから物語が始まる<sup>17</sup>。三人は極めて仲が悪く、巡礼にもまったく興味がなかったが、遺産目当てで仕方なく、総計二ヶ月、1,500キロに及ぶ巡礼ツアーに参加するのである。ツアーのメンバーは他に高校を卒業したばかりの二人の女性、そのうちの一人に思いを寄せて、彼女を追いかける形で参加するムスリムの同級生と、その従弟、さらに癌の療養中と思われる女性（ウォーキングを以前から好む、健康志向的に描かれる）がいて、仕事で巡礼路を歩むガイドを入れて9人となる。

この巡礼者グループに伝統的なカトリック信者はいないと言ったが、上記の三作のようなニューエイジ的要素もほとんど見られない。とりわけ巡礼を「強いられる」三人は宗教全般に対して無関心か反感を抱いており、中でも長女は激烈な言葉で教会批判、聖職者批判を冒頭で繰り返す。二人の若い女性は高校卒業祝いに片方の親からもらったツアー代金によってハイキング感覚で参加しているだけであるし、女性を追いかけるムスリムの若者にキリスト教的巡礼の感覚はむろんない。彼は素朴な従弟（ラムジー）を騙し、その母親（母子家庭である）に代金を出してもらうことでツアーに二人で参加したのであった。しかるにこのラムジーだけが、少なくとも旅の途中までは、サンティアゴ・デ・コンポステーラではなく、メッカの巡礼に赴くツアーに参加していると信じ込んでいて、登場人物の中で唯一、純粹に宗教的な行為として巡礼を捉えている。サンティアゴを望む丘に到達した折にも「アラーは偉大なり」という大声を挙げるのである——ここから『聖ヤコブ……メッカ』という皮肉な原タイトルが

<sup>17</sup> ちなみに、生前、もしくは死後の遺言としてサンティアゴまで「代参」を依頼する習慣は中世において珍しくなく、セローはこの風習を現代化して描いたという側面もある。

生まれている。

ガイドを含む9人のメンバーはいずれも何らかの問題を抱えている。フランスの現代社会における課題（失業・家庭・教育・人種問題等）をユーモラスに描くのを得意とするセローは、ここにそうした現代的テーマを忍び込ませる。長男は会社の社長だがワーカホリックで慢性的な健康不安を抱え、妻はアルコール中毒である。長女は問題校で働く高校教師で、夫が失業して一家を支えている。次男は単純に失業して離婚し、失業手当で暮らしている。高校卒業直後の二人は生活上の不安はなくとも、ティーンエージャーらしい不安定な年齢である。ムスリムの若者は恋の障害となる差別に悩み、従弟のラムジーは失読症<sup>18</sup>で字がほとんど読めない、癌の女性は転移・再発を恐れ、ガイドの妻は浮気をしている、等々。

ツアーの参加者たちは当初、歩行のつらさや宿の環境に不満を述べる。二ヶ月で1,500キロメートルと言えば、一日平均約25キロの踏破が求められ、巡礼宿はその宿代の安さと引き替えに（スペインではおおむね10ユーロ以下）、しばしば大部屋で二段ベッドの雑魚寝を強いられるから、積極的な巡礼者で難行苦行にポジティブな意味を見出すのでなければ、不満を持つのは当然である。しかし徐々に歩行のリズムが出て肉体的な辛さを乗り越えると、日常の世界と隔絶した環境にも慣れ、精神的な安定も得られ始める。それによってぎすぎすした人間関係も和らぎ、グループ内に年齢・性・出自を超越した特別の融和が生まれ、険悪なきょうだいたちの関係にも変化が生まれる。そうして最終的に目的地に到達すると、参加者それぞれが抱えていた問題はそれぞれなりに解決して、新たな人間になって日常生活に戻っていくことになる。ありがちなロードムービーと言ってしまえばそれまでだが、長期の徒歩巡礼が心身に及ぼす効能を理想化して描いていると言えよう。

本稿が関心の対象としている宗教問題について、もう少しだけ分析すると、キリスト教の教権批判を繰り返す長女クララを高校教師にしたことにはそれなりに意味がある。フランスにおける「ライシテ」（政教分離）は特に19世紀後半以来、公教育における教会勢力の排除が重要なテーマだったからである<sup>19</sup>。1980

---

<sup>18</sup> 移民問題や、単純な非識字者との区別の難しさもあって、正確なデータは示せないが、英語と同じく綴り字と発音の関係が複雑な仏語の話者において、失読症（dyslexia：難読症、識字障害とも）は社会問題になっている。

<sup>19</sup> ライシテの歴史については参照、伊達聖伸『ライシテ、道徳、宗教学：もうひとつの19世紀フランス宗教史』（勁草書房、2010年）、同『ライシテから読む現代フランス：政治と宗教のいま』（岩波新書、2018年）。

年代以降、ライシテ原則はイスラム教徒のかぶる「ヴェール」を学校の場で認めるか否かをめぐる議論によって脚光を浴びたが、まずは教会との距離を置こうとするクララの立場はこのような歴史的観点から理解できる（ちなみに、学校での仕事の辛さを訴える彼女はヴェール問題にも言及している）。ただし、クララの立場は一貫して反宗教的であるどころか、実は内心の信仰を隠していることを示唆する場面もあり、最終的には普遍的・典型的慈愛を体現する人物として描かれる。すなわち、失読症に悩むムスリムのラムジーに識字教育を施し、母を亡くした彼を自らの家に迎え入れることまで行うのである。クララの反教権の発言以外に、本作では教会関係者が戯画化され、批判的に描かれる場面もあるが、反宗教的とまでは言えないどころか、伝統的なキリスト教的図像が意味あり気に用いられる場面もある（結末近くでは聖母マリアの図像が唐突に映し出される）。キリスト教とイスラム教の関係についても、聖ヤコブがレコンキスタにおいてイスラム教勢力と戦うためのシンボルであったこと（マタモロス（＝ムーア人殺し）としてのヤコブ）に触れつつ、巡礼という行為の普遍性にも目配りをする<sup>20</sup>。一見、奇妙な映画タイトルにもセローのメッセージが込められていると考えられる。

総じてこの映画も、脱組織化した現代フランスの宗教事情を「巡礼」という行為に託して描いているという点で、スピリチュアリティの流行の中に、ただしどちらかと言えば穏健な伝統的宗教寄りの位置に、置くことができるだろう。

## エミリオ・エステヴェス『星の旅人たち』

「コンテンツツーリズム」のうち、特に映画に触発された観光行動を“Film-induced tourism”と呼ぶことは上（注3）で述べたが、エミリオ・エステヴェス（Emilio Estevez, 1962-）の『星の旅人たち』（2010年。原題は *The Way*——スペイン語の“El Camino”を英語に移植した表現である）は正に、アメリカ人の観客（世界中で公開されてヒットしたので、他国人も含めて）をサンティアゴ巡礼路に送り出す、さらなる起爆剤になった。先にも触れた徒歩巡礼完遂者の国籍別集計で、アメリカ人が2009年（同作公開前年）の2,540人から2015年の13,659人へと5倍以上に増えているのも、この映画の影響が大きい<sup>21</sup>と言われ

<sup>20</sup> 有名なイラゴ峠の「鉄の十字架」に巡礼者たちが石を積み上げるの行為を見て、ムスリムの青年が「どの宗教も似たようなものだ」と発言するシーンがある。

<sup>21</sup> cf. L. Lopez et al., “Film-Induced Tourism in the Way of Saint James”, in *Alma Tourism*, No.4, 2015, pp.18-31 (DOI: 10.6092/issn.2036-5195/4951).

ている（2019年の国籍別統計ではアメリカ人は第4位で20,652人）。

あらすじを簡単に紹介すれば、以下の通りである。カリフォルニア州ヴェンチュラに住む眼科医トム（妻とは死別）のもとに、世界中を旅している一人息子の訃報が入る。サンティアゴ巡礼路上、「フランス人の道」の出発点近くのピレネー山中で嵐に巻き込まれて遭難死したのであった。トムは現地に駆けつけて遺体を確認し、火葬に付すことを承諾する。息子の遺した旅の装備一式を受け取ったトムは、係のフランス人警部（巡礼経験者）の語るサンティアゴ巡礼の説明にも心を揺り動かされて<sup>22</sup>、リュックの中にその遺灰を入れ、息子の代わりに（あるいは息子と一緒に）サンティアゴ・デ・コンポステーラまでの徒歩巡礼を行うことを決意する。途上、同行することとなったオランダ人男性、カナダ人女性、アイルランド人男性に対して最初は心を開かなかったトムだったが、旅の苦難を共有するうちに次第に本音をおつけ合うようになり、最終的には親密な関係を築いて目的地に到達する（ちなみに、ここでも同行者たちはそれぞれ心の傷を抱えている）。トムは巡礼路の所々で、そして最終的にはスペイン最西端の海岸にまで赴いて、息子の遺灰を撒くのであった。なお、息子役は監督のエステヴェス自身が演じ、父親役にはエステヴェスの実の父、名優マーティン・シーンを配していることでも話題になった。

これまで紹介した作品に登場する巡礼者の中で、トムは唯一、現代における普通のカトリック信者と言える存在だろう。教会にも通う人物であり、神父との交流もある。ただし、とりたてて熱心な信者という訳ではなく（作の途中で“I'm not a very religious man.”という発言もしている）、サンティアゴ巡礼についても知識はほとんどない。一方の息子は大学院を中退した後も正業に就かず、世界を旅して回っているが、トムにはそのような行為がまったく理解ができないうし、理解しようともしていない。しかし、息子の死に直面して初めて、息子の内面世界を知るために、サンティアゴ徒歩巡礼を自ら敢行するのであった。つまりは、伝統的な価値観を持っていた初老の男性が、若者のスピリチュアルな探求に対して心を開く映画として、サンティアゴ巡礼に縁の無かった観客にも訴えかける内容だったと言えよう。なお、この映画も『サン・ジャックへの道』と同様、ニューエイジを彷彿とさせるような神秘的要素はほとんど含まれていない。巡礼路の所々で死んだ息子の姿を見たり、息子と語り合う情景を思

---

<sup>22</sup> “The Way is a very personal journey” という警部の言葉を日本語版字幕では「カミーノは自分探しの旅ですから」と訳している。

い描くシーンがあるが、基本的にトムの個人的なヴィジョンとして処理されている。こうした穏健なスタンスも、観客数を増大させる要因になったであろう。

日本でもこの映画はヒットし、サンティアゴ徒歩巡礼者を増やすのに貢献した<sup>23</sup>。ただし、日本人観客にとって意味付けを正確に理解しにくい要素がある。それは遭難死した息子の火葬と、散灰の問題である。現在でこそ、アメリカで死者を火葬する割合は半数を超えているが<sup>24</sup>、言うまでもなくキリスト教において火葬は「死者の復活」の観点から本来は認められない行為であった。20世紀に入り、衛生上の理由その他で火葬が徐々に広がって行くものの、ローマ教皇が火葬を正式に許可したのは20世紀後半、1963年のことに過ぎない。そもそもアメリカにおいて最初に火葬を行ったのは19世紀後半の神智学協会員だったと言われている<sup>25</sup>から、元来は東洋の宗教の影響も受けたオカルティズム運動の中に位置づけられる新しい風習だったということになる。さらに「散灰」については、2016年に至っても、教皇庁教理省からこれを否定する指針が発表されている。理由は「汎神論者、自然主義者、虚無主義者の類のあらゆる誤解を避けるために、遺灰を空中、地上、水中、もしくはその他の方法で撒くことは許されません<sup>26</sup>」というものである。

つまりトムによる息子の火葬、そしてとりわけ散灰という行為は、伝統的なキリスト教の枠外にあって、場合によっては異端・異教に関わるスピリチュアルな意味を持ち得るといえることである（ただし、トム自身にその点に関する特段の意識はなさそうで、灰を撒く際も胸の前で小さく十字を切っている）。一般の日本人にとって、火葬に対するキリスト教的な否定的意味合いはむろんないが、一方で自然葬や散灰に対して、現在ではむしろ西洋の影響で理解が広がっているという側面もあって、映画のこのエピソードが彼我でどのように受け入れられたか、その微妙な違いはなかなか想像しにくい。トムの居住地が宗教的

<sup>23</sup> 先に注4で触れた、筆者が行った簡易アンケートでは、徒歩巡礼を決意するのに特に推進力を与えた作品として、7名が本作のタイトルを挙げた。

<sup>24</sup> CNNのサイトに掲載された日本語版記事（2017年10月14日付け）によると、2016年に全米の火葬率が50%を超えたとのことである。ちなみに同記事に拠れば、アメリカ国民のキリスト教徒の割合は70.6%、そのうちカトリックは21%近くとなっている（<https://www.cnn.co.jp/usa/35106201.html>）（2021年2月12日最終閲覧）。

<sup>25</sup> J. Godwin, *The Theosophical Enlightenment*, Albany, 1994, p. 206. なお、この協会員の火葬を指示したのはブラヴァツキー夫人と共に神智学協会を率いたヘンリー・スティール・オルコットである。

<sup>26</sup> 「教皇庁教理省、死者の埋葬および火葬の場合の遺灰の保管に関する指針」、カトリック中央協議会ホームページ（2017年7月21日）<https://www.cbj.catholic.jp/2017/07/21/14103/>（2021年2月12日最終閲覧）

にも進歩的と言われるカリフォルニア州に置かれていたことも、スピリチュアリティの流行とこの映画の関係性において、考えるべき要素である。

しかし、そのような微妙な宗教的意味合いは無視しても、本作はサンティアゴ巡礼路の観光案内的要素に、いくつかのトラブルもうまく組み込んで、登場人物たちの心身の歩みを巧みに描いた娯楽映画に仕上がっている。本作は地元自治体や警察、教会の全面的協力も得て製作され、最終的には「商業映画としては初めて<sup>27)</sup>」、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂内で俳優たちを使ったミサのロケまでが許可されている。それはサンティアゴ巡礼の復活において、「コンテンツ」が大きな力を持った現代を象徴する出来事だったとも言えよう。

## むすび

本稿で関心を寄せた現代の宗教問題とサンティアゴ巡礼の関係について、最後に一言しておこう。ニューエイジやスピリチュアリティの流行を背景にした上記の作品の中に、伝統的な教会側からも宗教批判者からも否定的な見方をされる要素があるのは当然である。マクレーンは言うに及ばず、彼女より穏健と思われるカーケリングの作品も「宗教のパッチワーク」として方々から批判されている。ハンブルク出身の政治家で、アメリカ発のセクト「サイエントロジー」の批判者としても知られているウルスラ・カベルタ (Ursula Caberta) は、カーケリングの作品が秘教的 (esoterisch) な宗教市場へ人々を呼び込んでいるとして攻撃する。「カーケリングさん、あなたは秘教の世界でどれだけ多くの犠牲者を産んでいるか意識していますか<sup>28)</sup>」と。確かに、サンティアゴに限らず、「巡礼」という行為が現代におけるスピリチュアリティ流行の負の部分 (カルト教団、疑似医療、靈感商法など) と類縁性があり、そうした世界への入り口になる可能性は十分にある。それはかつて支配的であったキリスト教との緊張関係の中でニューエイジ思想が流行した西洋だけでなく、自覚的な宗教信者が少数派である日本においても同じことであろう。

一方で、本稿の冒頭でも述べたように、「巡礼」は宗教の「私事化」を代表する現象として極めて個人的で自由な行為であり、サンティアゴ巡礼もかつて最

---

<sup>27)</sup> DVD『星の旅人たち』(アルバトロス、2012年)の特典映像中にあるエステヴェス監督のインタビュー。

<sup>28)</sup> „Hape Kerkeling und seine Patchwork-Religion“ (Nürnberger Nachrichten誌の2011年8月10日付記事) <https://www.nordbayern.de/panorama/hape-kerkeling-und-seine-patchwork-religion-1.1423473> (2021年2月12日最終閲覧)

も重要であった聖ヤコブの遺骸崇拜という目的が希薄化している現在においては、むしろ宗教・宗派の間の壁や、ドグマ、セクタリズムを超越する契機ともなっている。事実、かつて巡礼を厳しく断罪した歴史を持つプロテスタントの信者も、現在ではまったく抵抗なくサンティアゴ巡礼路を歩んでいる。サンティアゴ巡礼は中世において、「ヨーロッパ人」としての共通意識を作り上げるのに貢献したが、現在ではヨーロッパはもちろん、全世界の人々に通じ得る目的と、集い合う場所とを与えている。非キリスト教徒、不可知論者、無神論者もその例に漏れず、セローの『サン・ジャックへの道』ではフィクション以外のなものでもなかったムスリムがサンティアゴ巡礼路を歩む例も、稀ではなくなった。巡礼路上では、たとえ束の間であっても、宗教や肌の色を超越した友愛があちこちで現出している。さらに、サンティアゴ巡礼の経験者がヨーロッパの他の様々な巡礼路を掘り起こし、非西洋の巡礼路（その代表例が日本の四国遍路や熊野古道である）にも世界中から人々が集まるようになって久しい。「巡礼」はかつて「禅」がキリスト教と仏教の橋渡しをした歴史にも似て、今後も積極的な意味を持ち続ける可能性がある。

ともあれ、上で紹介した文学や映画の力もあって、サンティアゴ巡礼路に押しかける徒歩巡礼者の数は飛躍的に伸び、とりわけ人気の高い「フランス人の道」では場所や季節によって飽和状態に達している（アルベルグが満員で泊まれない、など）。サンティアゴ巡礼の魅力に取り憑かれた人々は、今では混雑の少ない別の道にも目を向けている。2013年に出版されたジャン＝クリストフ・リュファンの『永遠なるカミーノ<sup>29</sup>』は、巡礼者の数が少なく、より自然に溢れた「北の道」を辿った紀行文であった。リュファンはゴンクール賞受賞作家であり、50歳代でアカデミー・フランセーズ会員にもなった有名な小説家だが、この作品も多くの読者を惹きつけ、各国語に翻訳された<sup>30</sup>。

同作についてはここで詳しい分析の対象としないけれども、上に見た作品群や、他の多くの巡礼記と数々の共通点が見られる。もしも白紙の状態ですら読み比べれば、相互影響を超えて、剽窃を口にしたくなるような構造や表現

---

<sup>29</sup> Jean-Christophe Rufin, *Immortelle Randonnée : Compostelle malgré moi*, Chamonix, 2013（今野喜和人訳『永遠なるカミーノ——フランス人作家による〈もう一つの〉サンティアゴ巡礼記』春風社、2020年）。同作については「訳者あとがき」参照のこと。

<sup>30</sup> インターネット上で調査した限り、翻訳出版された順序で挙げれば伊・西・露・葡・中国（簡体）・韓国・中国（繁体）・英・独・日本語訳がある。

すら見て取れるだろう。仮にそれらの作品に多かれ少なかれ共通するシエマを抽出すれば、おおよそ以下の通りとなる。

まず、巡礼を行う語り手なり登場人物たちは、当初からサンティアゴ巡礼に自らのイニシアティブで歩み出す敬虔な信者ではなく、巡礼についての予備知識もない。何らかの事情で巡礼に引き寄せられたり、強いられる場合が多い（リュファンはこれをカミーノが「あちらの方から顛れてきた」〔拙訳24頁〕と表現する）。そして彼らはたいい日常生活において大小様々な問題を抱えている。それは自身の病気であったり、親しい人との離別・死別であったり、人生の岐路における様々なアイデンティティの危機であったりする。巡礼に歩み出してすぐ、日常の生活とはまったく異なった歩行の労苦に直面するが、それは足の肉刺や筋肉痛などの肉体的な困難ばかりではなく、中世の巡礼路とは似ても似つかぬアスファルトの道や大都会の中を歩き続ける単調さとの戦いでもある。周囲の巡礼者との関係も最初はうまく紡ぐことができず、共同宿舎での睡眠にも苦勞を強いられ、いったんは巡礼を途中で放棄する誘惑に駆られる。だが、その誘惑を何とか振り払い、ある程度の日数を経ると、いつの間にかそうした難行への耐性がつき、何も考えずに歩くことができるようになる。出発前に振り捨ててきた外なる日常と隔絶した一個の剥き出しの存在となり、それぞれのペースで歩きながら、同行・別離・再会を繰り返す多種多様な巡礼者たちとの間に、他所では得られない連帯感が生まれる。最終的には自らの内面に秘められた力や外界の超越的なもの（たいいとは伝統的なキリスト教の神ではない）に関する何らかの発見を行って目的地に到達するが、そこで得られる歓喜は一瞬で、再び日常の世界に戻っていかねばならない。それでも、巡礼前とは何らかの形で異なった、世界との付き合い方がそこから始まる……。

このような月並みにも映るプロットの共通性は、模倣や相互影響を超えて、「巡礼」という行為が人間の心身にもたらす普遍的作用に根ざしている部分もありそうである。「巡礼」研究においてしばしば言及されるファン・ヘネップによる古典的な通過儀礼論<sup>31</sup>——分離期・過渡期・統合期の三段階からなる——と、それを敷衍したヴィクター・ターナーのモデル<sup>32</sup>——境界的段階である「リミナリティ」と、そこで構成員の間に水平的かつ渾沌とした人間関係が構築される「コムニタス」を特徴とする——を用いて、これらの巡礼記に見られる類同

<sup>31</sup> ファン・ヘネップ（綾部恒雄他訳）『通過儀礼』岩波文庫、2012年。

<sup>32</sup> V・W・ターナー（高倉光雄訳）『儀礼の過程』、新思案社、1976年。また参照、V. Turner & E. Turner, *Image and pilgrimage in Christian culture: anthropological perspectives*, New York, 1978.

が説明できるかもしれない。また一方で、古代以来、神話・伝説・文学の中で繰り返し語られてきた神々や英雄の遍歴譚・冒険譚の構造と一致している側面もあるだろう<sup>33</sup>。その意味でサンティアゴ徒歩巡礼記は、現代における物語類型の一つを作り上げていると言っても過言ではない。ストーリーテラーとしても定評のあるリュファンは、自らの巡礼体験を基にこのような類型をあえて反復することを厭わず、徹底したリベラリストの立場からサンティアゴ巡礼の現状を冷徹な批評精神とユーモア、軽い自虐と共に描き出している。

現代の巡礼者たちは伝統社会のような儀礼に強制されてではなく、このような文学や映画のインパクトで自分から巡礼路に歩み出すが、意識するしないに関わらず、それらの物語を今度は自分で実際に「生きる」ことになる。巡礼中の現実の出来事や意識の変遷が物語と正確に一致することはないだろうが、それでもどこかで物語内容との往還の形で内省を行わずにはいられない。それはある意味で紀行文学を自らの身体で「翻訳」する行為とも言え、さらにそこで直に生きられた経験は、今度は自らの巡礼記やSNSへの書き込みを通じて新たに「翻訳」され、外に発信されるのである。

---

<sup>33</sup> その観点からリュファンの作品を分析した研究に以下のものがある。P. Rajote, « Héroïté et mise en récit de l'expérience pèlerine à Compostelle », in *Téoros, Revue de recherche en tourisme*, 31,1 (2018). (<https://www.veilleinfotourisme.fr/tendances-et-recherches-en-tourisme/articles-de-recherche/heroite-et-mise-en-recit-de-l-experience-pelerine-a-compostelle>) (2021年2月12日最終閲覧)。